

シベリアで流した涙

長崎県 元島和男

昭和二十(一九四五)年八月十五日正午、奉天(瀋陽)北陵の陣地でラジオから流れる玉音放送に、無念の涙が止めどなくあふれ出ました。「負けたのか、負けたのか」残念無念、多くの人達が大陸の広野で、北辺の孤島や南海の島々で、日本の安泰を願って尊い命を祖国に捧げられたのに、何と悲しいことだろう。東の方を向いて大地にひれ伏して、天皇陛下のご無念を推察して泣きました。

折しも米軍のロッキード双胴機が、低空で悠々と飛来しているのを見た砲手達が、急いで高射砲に飛び付きました。これを見た中隊長が大声で「止めろ！ 止めろ！ 打つな！ 打つな！ いま、天皇陛下の無念のお声を聴いたばかりじゃないか」と高射砲に走りより、涙声で「貴様達と俺も同じ気持ちだ。射ちたいが射てないのだ」と叫ぶ

中隊長に、砲座から降りて「中隊長殿、無念です。お許し下さい」と縋りよる姿に大の男達が声を挙げて泣きました。十五日の日の一幕です。

重苦しい空気の中、私は司令部に命令受領に行きました。その命令は、十九日ソ連軍が奉天に到着の見込み、兵器は直ちに処分せよ。現地入隊した召集兵と現役兵は直ちに兵役解除とする。部隊は奉天南方十五キロまで退避せよ」との命令でした。命令伝達の古川少佐が「元島兵長、復唱せよ」との命令で、各部隊を代表して復唱して最後の命令受領の任務を果たしました。

急ぎ大隊に帰り、大隊長に師団命令をお渡ししますと、直ちに中隊長達を呼集され「命令通り兵器を集めよ。現地入隊兵を集めよ」と次々命令が発せられました。そして現地入隊兵には「兵役を解除する。直ちに帰郷せよ」と命令されました。集められた小銃類はトラックに積載され、長沼公園の池の中に投げ込まれました。この方法は、ソ連軍や満人に使用させないための苦肉の策でした。

私達は菊のご紋章のついた小銃を撫でながら、涙を流して池に投げ込みましたが、辛い思いでした。

投げ終えて大隊に帰りますと、現地入隊された方々が帰り支度をして私を待つておりました。

「元島兵長どうされますか」と尋ねるので、私は「皆さん申し訳ありません。私は一年八カ月間同じ釜の飯を食つて来た皆様とこの後も行動を共にしたいと思えます。皆さんお元気で帰り下さい」と申し上げてお別れました。その中に大連市から入隊した同年兵がおりましたので、私は日の丸の寄せ書、写真等身の回りの品を風呂敷に包み、大連市上荻丁の住所を書き、山崎小老は私の叔母だから連絡をとつて渡してくれと頼みました。この品物は八月二十一日、大連駅にて無事に叔母に渡つたと云うことが、昭和二十二年八月三日判明しました。

現地入隊者は兵役解除されて帰れるとのニュースをラジオで知り、叔母は十八日から毎日大連駅に一日中立つて待つたそうです。たまたま二十一

日正午ごろ、大連駅に着いた列車から兵隊がぞろぞろ降りて来たので、若い兵隊さんに「どちらからお帰りですか」と尋ねたら「奉天からです」と云うので「奉天の第二六八七部隊の元島と云う兵隊は知りませんか」と尋ねたら、一人の兵隊さんが「知っていますよあなたは山崎さんですか、あゝよかった。あれは馬鹿だから一緒に帰ろうと進めたが、帰らんと云つてこの包を預かりました。それじゃ渡しますよ」と渡されたので大切にしていたのですが、引揚げる時コロ島で荷物の検査があつて、日の丸等はみんな没収されてしまったと裸同様で引揚げて来た叔母夫婦が笑いながら語ってくれました。

八月二十日、私達は奉天の北陵から約二十キロ南方に退避し、満州人の家を借りて数人ずつ別れての生活が始まりました。軍事訓練もありませんし毎日ぶらぶらと歩き回り、時間つぶしの毎日でしたが、今後どうなるのか、日本はどうなっているのかと不安を語り合う毎日でした。

時折パンパンと銃声が聞こえて来ます。その度ごとにバツと立ち上りました。満州人が日本軍の兵器を奪い襲うとのことでしたが、無防備の私達は対抗することも出来ず、敗戦の悲哀をしみじみと感じました。一カ月ぐらいたった九月十八日、奉天北陵の铁路学院に集合せよとの命令を受け、大隊の四百五十人はその铁路学院へ移動しました。ここでの情報は、これからウラジオストク経由で日本へ帰るとのことでした。直ちに身支度を整えて列車に乗車せよとの命令で、私達は背囊に詰められるだけの衣類を詰めて、重い背囊にふらふらしながら貨物列車に乗り込みました。

貨物列車の中は二段式の寝台になっており、便器も整備され、一両に三十人ずつの定員で、炊事車、食糧庫車を連結し、二十車両で編成されておりました。

昼間の疲れでうとうととしておりましたら、列車はいつの間にか奉天を出発していました。ウラジオストク経由で日本へ帰れると、喜びの夢を乗せ

て北へ北へと走り出しました。

大きな駅に止まりますと、一斉に下車し、大便の用足しが始まる。まるで用便戦争のようでした。止まっては走りの連続で、どこをどのくらい走ったのか全然分かりません。畑の中で急停車したので降りて見ますと、線路の側に流れている小川で朝飯の準備をせよとの命令で、小川の水を飯盒にくみ、粉味噌を入れて味噌汁を作り、うまいまいと食べました。

翌朝、この小川を見ますと黒い泥水です。一同びっくり、この泥水で味噌汁を作ったのかと大笑いしたこともありました。

そして連日、北満州から南へ下って行く一般邦人に乗せた屋根のない貨車の列車と出会いました。国策によって満州に移住した人々や開拓団の人々が、すべてを投げ捨てて裸一貫で引き揚げるのです。雨に濡れながら私達に手を振って「兵隊さん、元気でねえ」と口々に呼びながら南下して行きました。私はその度ごとに手を会わせました。一般

邦人を守らねばならない関東軍が屋根のある貨車に乗って北へ、一般邦人の方々は屋根のない貨車に乗り、ずぶ濡れになりながらも「兵隊さん元気でねえ」と手を振って下さる姿にまるで正反對ではないかと、頭を下げてお詫び致しました。

昭和四十年ごろから始まった肉親探しをテレビで見る度に、南下して行かれた人々の姿を思い浮かべ涙が流れます。手を振って下さったあの方々の中にも、可愛い我が子を満州人に預けてくれた人達が多かったのではないか、どんなに辛い思いで手を振られたであろうかと思ひ出して、涙を流してテレビを見ている私の姿に孫達からは笑われました。

出発して十日過ぎたころ、軍服を脱がされ、満鉄の現場の人達が着用していました綿入れ服と着替えさせられました。脱いだ軍服はまとめて他の貨車に積まれました。十月初めになると北満州は寒くなります。軽く肌寒さを感じました。十月十一日、私の二十三歳の誕生日、ソ満国境の街黒河

に着きました。全員装具を持って下車せよとの命令で下車します。駅のすぐ傍らに大きな黒竜江が流れておりました。私達は列車から船に乗り換えて、黒河から対岸のブラゴエシエンスクに二十五分ぐらいで到着しました。

近くの駅には私達を輸送する貨物列車が待機しておりました。列車に着いているマークを見ますと満鉄の貨物列車でした。満鉄のレールは広軌線路ですから、そのまま抑留者輸送に使用され、車内は二段式で既に何回も使用されているようでした。通る人は女のばかりで、渡された食べ物には黒パンとチーズでした。到着して約二時間、大隊の全員が乗り換えますと列車が動き始めました。

列車から見える範囲の畑には、馬鈴薯が植えられたまま収穫してありません。みんな女性と子供達ばかりで若い男の姿は全然見られません。男達はドイツとの戦争に狩り立られて、労働力の不足で畑の馬鈴薯の収穫もそのままなのであろうと思えました。小さな駅に停車しましたので女性の駅

員に進行方向を指さして

「ウラジオストク」と尋ねますと、手を横に振って「モスクワ」と答えますので「だまされた」と大声で叫びました。

戦友達がびっくりして「だまされた！」と扉の側に駆け寄りました。列車はウラジオストクとは反対にモスクワ方面に走っているのです。一体どこに連れて行くのであろうか、車内は騒然となりました。もうどうしようもありません、列車は広い大草原を北へ北へと走りました。

黒パンとチーズに、塩水ばかりで中身のないスープで、腹は空くしおしっこは出るし、便器の傍に寝る人には気の毒なくらいでした。北に進むにつれて寒くなってきました。四日目大きな湖に沿って列車は走ります。駅員に聞くとバイカル湖と教えてくれました。世界一深い湖であるバイカル湖かと頷きながら眺めました。夕日が湖面に輝き素晴らしい眺めでした。シベリヤの大平原、大森林の広いこと、話には聞いておりましたが驚くば

かりでした。列車の機関士も女性、駅員も女性、若い男の姿がほとんど見られませんでした。北へ進むにつれて雪が降り出しました。

カラガンダと云う炭坑の街についたのは、十一月三日（明治節）でした。広々とした白雪の平原に列車は止まり、見ると、ソ連軍の兵士が銃を手にして「ドワイ！ ドワイ！」と叫んでいます「降りろ」と云うことでしよう、はるか前方の雪の中に建物が見えました。指さしてあそこまで歩くと云うのでしよう。分からないロシア語ですが、手ぶり身ぶりで察しがつきます。日本に帰るというのでいっぱい詰めこんだ背囊を手伝ってもらって背負ったけれども、二カ月半ぐらい貨車の中の生活で足がよるめき、膝まで没するような雪をかきわけながら進むのは大変でした。

気温は零度以下であろうに、流れる汗を拭き、息を吐きながら、こんなことなら持つてくるんじゃないかなったと後悔しても後の祭でした。恐らくみんな同じ思いでしょう。振り返れば私達を乗せて

来た二十両の貨物列車が雪の中に長く見え、戦友達も掛け声掛けて歩いて来ます。建物に近づくとき高い塀に囲まれた平屋造りの収容所があり、四カ所の高い所にソ連兵が立っています。やつとたどり着くと山田部隊八百人が先に到着しておりまして。

私達は二つの建物に別れて入りました。室の中は四十人六列で真ん中にペチカが三つ置かれ、便所は外便所で室から二十メートルぐらい歩かねばなりません。五棟に兵隊千五百人が入り、他に食堂と入浴場、洗濯場、理髪所、将校室等があり、四カ所の監視所があります。運んだ荷物は一部を除いて取られてしまいました。

抑留生活は六時起床、六時半に交代で食事、八時半に作業所へ向かって出発、夕食は六時に交代で食事する。消灯九時、食事は五〇グラムの黒パンに、飯盒の蓋におかゆ、飯盒に半分ぐらいのスープ（中身はほとんどなし）が毎日三回の食事でした。日本人は身体が小さい割に大食ですから、

この食事では腹が減ってみんな困りました。

カラガンダはカザフ共和国に属し、中央アジアに位置し、石炭の街でした。私達の収容所は第二一捕虜収容所とのことでした。これも後でわかったことですが、カラガンダ地区の抑留者の収容人員は五万人ぐらいと云われ、日本人の他にドイツ人とイタリア人が収容され、私達の収容所にも僅かではあります。ドイツ人とイタリア人がおりました。

私達の作業は建築作業で、基礎の穴掘りから木造の平屋と二階建、時には煉瓦作りの建築作業にも酷使させられました。作業場まで歩いて行くこともありました。遠い作業場へはアメリカ製十輪トラックで送り迎えしてくれましたので助かりました。

十二月から三月までは土が厚く凍っているので、大きな鉄棒を「ヨイショ！」と声をかけて大地に打ち込みますが、「カーン」と音がするだけで穴は掘れません。鉄棒を打ち込む度に氷が飛び散

つて、それが解けて顔も胸もびしょびしょに濡れます。

この作業でどんなに頑張っても作業点数は三十点ぐらいです。腹が空くし力がなくなり鉄棒を握って立っている姿は憐れなものでした。零下二〇度もの酷寒の中で何回悔し涙を流したことでしよう。マスクから上に出る空気は眉毛につくと凍って目が見えなくなります。マスクをはずすと風邪にかかるのでマスクははずせません。腹が減るので実のない塩と油のスープを飲むので小便が近くなります。外便所ですから震えながら用を達して帰ると身体が冷えているのでまた小便したくなります。五回、六回と繰り返していると起床時間になり、夜もろくに眠れないままで苦しみました。寒いので風邪を引くし、腹が冷えて下痢を起こすし、夜間の大便秘と小便に苦労しました。

朝起きて外に出て「チカツ」と頬がする時は気温は零下二〇度を越しており、寒いと云うより痛い感じです。太陽が昇るにつれて太陽が二つにも

三つにも見える。空気中の水蒸気が凍ってプリズム現象を起こして太陽が数多く見えるのです。庭の真ん中にある寒暖計が零下二五度以下になれば作業が中止になるので皆、この寒暖計を見に走り気温を確かめます。

零下二五度すれすれの時は、風邪予防のため口にしたマスクの隙間から、出る吐く息がまつ毛に凍りついて目が見えなくなり、一日に何十回もこすって凍ったまつ毛を温めねばなりませんでした。私が苦しんだのは寒さが厳しくなると鞆丸がきゅつとしまり固くなって、歩く度に痛みを感じ、歩けなくなり困りました。この痛みは他人に分からず涙を流しながら歩きました。

五月ごろになると、雪が解け始めて、道という道は川になり、靴は水浸しになり、靴下代わりの布もびしょよりで、宿舎に帰ると急いで洗濯して乾かさねばなりません。室内の温度は低くなかなか乾きません。やっと乾いたかなと見るといつの間にかなくなっている。布ばかりか手袋も軍服も

なくなつてしまふ。盗人ばかりで盗られて困つて
いる人を見ると、日本軍人のなれ果ての浅ましさに
何回涙を流したかわかりません。

昭和二十一年十一月三十日、私達の兵舎に異変
が起きました。私が将校室での雑談を終えて兵舎
に帰ると室内が騒然としています。私の姿を見た
仲間達が、

「来た来た、元島が来たぞ」

「あなたに頼みがあるんだ、聞いてくれ」と
手を握り説明を始めました。その内容は、

「日本はポツダム宣言を受諾した八月十五日の
終戦の詔勅により軍隊はなくなつたはず。にも拘
らず階級章を付けているのはおかしいではない
か？ 我々は十二月一日を期して階級章なし、皆
平等になる。選挙により選ばれた人達によつて行
動することにする。今から大隊長をはじめ将校団
にこの決議を宣言に行く代表として三人選んだ。
その一人に君を選んだので承知してくれ」

と云うことでした。私は聞いてびっくりしまし

た。一時間前まではそれらしき気配もなかったの
に、いつなげこんなことになつたのか嘖然としま
した。私は慌てて断りました。

「私でなくとも先輩の立派な方がおいででしょ
う。私のように若い者になが出来ますか。それ
に先刻まで大隊長や将校の皆様と今後のことを聞
いて来たばかりに困ります、断ります」

と大声で断りますと、

「なに！ 断る。貴様は自分だけが将校から可
愛がられて、俺達はどうなつてもいいと云うのか」

と、古兵達が叫びながら詰め寄つて来るのを、

筒口軍曹と板垣上等兵が「まあまあ」となだめ

「実はなあ、貴様がない時に、今云つたよう
な決議をこの兵舎の者一同で決定した。そこでこ
の決議を誰と誰が将校団に申入れするかで人選に
入つたところ、筒口と板垣の二人は発起者だから
当然のこと、あと一人をとつた時、将校団に一
番信頼され、みんなの信望ある元島さんにと、決
めた。苦しい立場はよく分かるが、この收容所千

五百人のため男になつてくれ」といいます。板垣上等兵（年令は四十歳ぐらいで大阪帝大の教授で召集されて来た人）が頭を下げられるし、筒口軍曹（長崎高商卒業で福岡県の炭坑主の長男）も引き受けてくれよ頼む、将校団を説得出来るのは貴様だけだと、共に顔を下げられるのでほんとうに困りました。

皆さんが一斉に私を見詰めている中で本当に困りました。私が断つたらどうなるのだろうかと考えながらようし仕様がなれないと思い、

「皆さん私のような若僧に大役を抑せつけて下さつてありがとうございます。やります、行きま

す」
と返事しますと、室内から「よかつた頼むぞ」と一斉に拍手が湧き上がりました。

私達三人が将校室に入りますと、将校団の人達も兵舎の騒然とした空気を察知して緊張しておられました。

私が「大隊長殿はじめ将校の皆様方に申し上げ

ます。私が兵舎に帰りましたところ、下士官と兵隊一同のお願いが決議文として決定されておりました。ただ今から筒口軍曹が読み上げますので、なにとぞご協力をお願い致します」と報告し、筒口軍曹が決議文を大声で読み上げました。

それが終わるやいなや、大隊長が烈火のごとく怒り「元島！ 貴様もこの連中の一味だったのか。見そなたぞ！ そこに座れ」と、横にあった軍刀を引き抜き大上段に振り上げられました。将校室が一瞬しんと静まり返りました。私は覚悟を決めて、

「大隊長殿、斬つて下さい、私も兵舎に帰るこの議決文を聞いた時、なるほどと思いながらもこの室に使者に立つことを断りましたが、皆が将校の皆様方にお願ひするのには、元島お前が一番適任だ、兵隊の願ひを伝えてくれと頼まれました時考えましたが、事実はこの決議文の通り武装解除したので、日本軍隊はありません、今後のことを考えて下士官と兵の願ひを聞いて下さい。大隊長

殿さあ斬って下さい。私を斬って胸が納るなら斬って下さい。その代わり下士官と兵隊の願いを聞いて下さい」と大声で叫びました。

大隊長は軍刀を大上段に構えたまま立っておられました。やがて「分かった」と怒った声で云い捨て、軍刀を鞘に納められました。私達三人は「ご協力をお願いします」と一礼して将校室を後にして兵舎に帰りました。兵舎では四百五十人の人々がどうなるのかと私達の帰りを心配しながら待っていた様子でした。私が大きな声で「ただ今帰りました」と叫びますと、一斉に拍手が湧き上がりました。

年長の板垣さんが「みなさんの決議文を将校団に伝えました。これから階級章を取りはずしますから立ち上がって下さい。いいですか一、二、三で外しますよ。一、二、三、はい」の声で襟の階級章をはずすと、一斉に万歳の声が湧き上がりました。こうして私達は軍隊組織に決別しました。

明ければ十二月一日、襟章をはずした服装では、

誰が下士官で古兵かわかりません。もう挙手の礼はなく、ただ「お早うございます」の挨拶に変わりました。

「殿」は「さん」に変わりました。将校は襟章はつけたままでした。昨日までは作業に行く時、五列に整列の号令を掛けていましたが、もう号令を掛けることなく皆がきちんと整列するので、手持無沙汰で気の毒なくらいでした。

収容所では必ず五列に並ばないとソ連兵は数を当り得ないのです。門の出入時に行う人員点検には「五列、五列」と叫んで整列させて数を整えます。四列は数を数えられない程度の教育しか受けていないのです。

困ったのは、将校の手を離れた私達は、改めて指導者を選ばねばならないことです。当然将校団に決議を申し入れた三人には責任がありますので、皆さんの協力を頂きお世話せねばならなくなりました。

一番困ったのは二十三歳の若き二年兵の私でし

た。三年兵から五年兵の古兵に下士官の方もおり、階級章を外したとはいえ年齢の順序があります。しかし止むを得ずお世話をするにしました。

大隊長殿が軍刀を抜いて私を斬ろうとしたことがソ連側の知ることになって、翌朝早く特別收容所に移されたと聞いて、びつくりして申し訳ないことをしたと思いました。私より驚かれたのは将校の方々だと思います。ソ連側に密告する者がいるからには、兵隊にうかつなことをしたら大変なことになると思わせたことに対して、申し訳ない気持ちでした。

ソ連ではどんな仕事にもノルマがあり、作業量によって点数がつけられ、給料が決定されることを知りました。抑留者にもこれが適用され、それは食事によって区別されました。雑役はどんなに汗びっしょりになって働いても五十点ぐらい、一〇〇グラムのパンしかもらえません。技術が必要な大工、左官の仕事は少し面倒な仕事をしますと、パンが三〇〇グラムぐらいの大きなパンがもらえ

ます。一〇〇グラムのパンでお腹を空かしている雑役作業の者は、そのパンが欲しい、私はこのパンに目を付けました。

兵舎内で泥棒が横行するのは、金になる他人の物を盗み、作業場でこっそりとパンや金に替えるためです。人が困るのを知りながら軍服や靴下、タオル類などを盗むと云う悲しい出来事が毎日続きました。

作業場では、近くを通るロシア人マダムがパンを持って通るのを見ると、作業を止めて走り寄り腹が空いて困るのでパンを下さいとマダムに膝まずいてねだる。タバコを吸う人はロシア人男性にねだる。まるで乞食同様の憐れな姿でした。

泥棒や乞食姿をなくするために、私は大工、左官経験者三十六人の方々に集まって頂きました。

「皆さんにお願いがあります。皆さんは立派な技術をお持ちになり、その技術を活用し大きいパンを食べておられます。そのパンを雑役する人々に分けて下さいとお願いするためにお集まり頂きま

した」といいますと、皆さんが「なんで分けにやならんのか、伊達や酔狂で腕に仕込んだんじやないぞ、そんなことは出来ない」と、一斉に不満の声を立てた。私は更にお願ひしました。

「その通りでしょう、でも考えて下さい。一生懸命努力しても雑役の方々は小さなパンです。このままなら栄養失調で死亡されるでしょう。同じ日本人としてそれでは可哀想ですよ。皆さん達だけが大きいパンを食べて生き残られる。そのようなことになってもいいんですか。シベリヤの地で仲間を見殺してもいいと云う考えですか」と語気を強めてお願ひしました。皆さんは黙って返事が出来ませんでした。

しばらくしたら代表格の一人が「分かりました。皆で相談するから明日まで返事を待ってください」といい、私は「よろしくお願ひします」といつて引き上げてもらいました。翌朝、代表三人から呼ばれて行きますと、

「昨夜皆で話し合いました。その結果あなたの

おっしゃる通り、皆元気で日本に帰らにやならんので、我々も協力しようと思めました。しかしこのことがソ連側に分かると大変なので内密にして下さい」との快い返事でした。私は「そりゃよかった、皆さん方も喜びますよ、ありがとうございます」と三人の手を振ってお礼をいいました。

その日の夕方作業から帰って来た一同に「大きなパンを毎日三十六人づつ交代でもらえるよう承諾を頂きました」と報告しますと、「よかった、ありがとう」と拍手が湧き上がりました。大工、左官経験者もニコニコ笑いながら頷いてくれました。こうして第一段階は成功しましたが後が大変でした。大きな黒板のような板に列記した四百五十人の名前の上に三十六人のパンに印を書き食券を渡しました。毎日のことですから大変な仕事でしたが、その結果、泥棒行為が減少しました。十一日に一回は大きなパンが食べられると希望が持てるようになり、生活の雰囲気が変わり兵舎内が明るくなり、作業の成績も上昇して来ました。

第二段目は心の問題でした。ラジオも何もないので心の楽しみがありません。相談の結果、耳から入れる物として、山本部隊に三文小説を書く人がいましたので小説の執筆をお願いしました。

しかし書く紙がありません。そこで皆さんに一月一回全員に配給があるタバコの包み紙の抛出をお願いすることにしました。今までは大使用の紙にはこの固い紙をもんで柔らかくして使用していたので困ると云う人もおりましたが、協力してくるようになりました。こうして一月に千枚の紙が集まりました。小説家には作業を免除して小説を書いてもらいました。そして書いてもらった小説を誰が読んでくれるか、その人選に困りました。とうとう誰もおらずに私自身が各兵舎を三週間隔に、二十枚ずつ読んで回るようになりました。

小説は捕物帖でしたから大衆的で皆さんが大変喜んでくれました。各室に入ってから「皆さん昼間御苦勞様でした。ただ今から捕物帖を朗読しま

す」と前口上を云いますと一斉に拍手が湧き上がります。皆熱心に聞いてくれました。朗読が終わりますと「皆さん明日も頑張りましょうよ。皆元気で東京に帰りましょう。さて次はどうなりましょうか、次が楽しみ」といいますと一斉に「ありがとうご苦勞さん」の聲が上がります。四つの兵舎が終わるのに一時間半掛かりますが、各兵舎共みんなが待つてくれましたので張り合いがありました。

二回三回と回るうちに、私は収容所内ですっかり人気者になってしまいました。「よし、これはこれでよし」と、次は頭を使うものと文芸同好会を提案しました。詩、俳句、短歌を作る、それぞれ二十人ぐらい。会を作り、毎週日曜日食堂に集まって勉強して頂きました。百五十人ぐらい入る食堂は毎週日曜日はいっぱいでした。出来た作品の一部を板切れに書いて食堂に並べました。皆熱心に読んでくれました。

そして立派な作品を作ろうと皆、昼休みに一生

懸命に考えるようになりました。以前は少ない昼食を食べるだけでしたが、それからは物を見る目が変わりました。仲間同志が句を作り、あの句この句と話し合っている姿を見て、皆の心配を柔らげることが出来たと嬉しく思いました。

次に考えましたのが演劇で、出演者を募りましたがなかなか集まりませんので、若い人から指名して協力を求めました。何とか十五人ほど納得していただきましたが、台本をどうするかにまた困りました。誰も名乗りを挙げる者がおらず、結局脚本も私が書くことになりました。着る衣装がないので、現在着ているもので出来る演劇脚本を書くことにしました。昼間の作業を終え、食事が終わると食堂で脚本を書き、演劇の稽古をしました。初めての役者ばかりで笑い声の中の練習でしたが楽しい練習でした。半月掛って、何とか下手くそながら見せられる物になりました。

発表当日、急いで夕食を終えてテーブルを外に出し、簡単な舞台を作り、見物客は土間に坐りま

した。『平等な家庭』と題しての芝居でした。見物者の中にソ連のスパイがおりますので、軍国色を排除する内容であるように考えました。しかし皆が演技をやりますが台詞を忘れて頭をかきかきの姿に、見物者から「よかよか、わかっとなる」とか「うまいぞ、うまいぞ、下手くそ」の野次が飛ぶ大笑いで食堂のなかは昼間の疲れも忘れての和やかな一刻でした。

一回に全員が食堂に入れませんでしたので三晩続けた熱演となりました。演ずる者見る者心が一体になった場面です。演しものの内容は、将校服を着た父親が威張りちらして家族を叱るのを、五人の家族がなだめすかす。親父、昔なら威張らしてよかつたが、戦争に負けた今日、皆の立場を尊重して助け合ってこそ、家庭が平和になり、親父が尊敬され、明るい家庭となる。親子の立場を理解し平等にしようという内容でした。

この下手くそ演劇の評判が良く、收容所長から隣の收容所への慰問をすすめられ、板屏をはずし

て入りましたら驚きました。同じ第二六八七部隊で八月十日の移動で別行動をとった仲間達でした。久しぶりの再会を喜び会い、演劇を披露し、大変喜ばれました。下手くそ芝居もよかったと思いましたが。ソ連兵のマンドリン機銃に脅かされ、「ラポータラポータ（働け働け）」の声でこき使われている生活の中で、こんな楽しい一刻もあったのです。作業帰りに太ねぎ一本を発見し、俺が見つけたと、大の男が取り組みあって喧嘩し合ったことも、日が経つにつれ次第にそのような争いも影を潜めてしまいました。

瘦せこけて三級になり作業休になる者もおりましたが、昭和二十二年七月までに死亡した者は二人でした（一級は元気な者、二級は少しやせた者）。一人のK上等兵は、満州を離れる時からの病人で四月入院して死亡しました。もう一人は毒茸を食べて中毒症状で死亡しました。

昭和二十一年七月中旬、突然、空が暗くなりました。見上げるとバツタの大群がギリギリと羽音

を鳴らせて飛んでいるのです。舞い降りて来て、私達の頭に服にバツタだらけ、手で追い払っても数が多く一面バツタだらけ。どこを見てもギリギリと地上一面バツタの大群です。飛び立った後は草の芽は食い尽くされて緑色はなくなっています。三日三晩続き、さすがにシベリアだと思いました。煉瓦造りの家を造るには、煉瓦とセメントを運びます。ソ連人の職人が煉瓦は日本語で何と呼ぶのかと尋ねるので「煉瓦は羊羹。セメントはぜんざい」と教えますと、分かった分かったと云って「ヤボスキサルダート（日本の兵隊）羊羹、ぜんざい。ダワイダワイ

（運べ、運べ）と呼ぶと、「そりや、ヨウカン」「そりや、ぜんざい」と笑いながら運びました。

しらみには毎日苦労しました。休憩のときにシヤツについているしらみを取ってつぶしていると、ソ連兵がしらみを見て、それは何かと云うので「マンドリ」と教えて、かゆい時マンドリを鳴らす時のまねして見せると「おゝマンドリン」と笑い出

します。スターリンの悪口を云おうとすると、ウクライナ人の職人が走って来て私の口に手を当て「云うな、云うな」とソ連兵を指さして、あれが銃でパーンと打つぞと教えてくれます。このウクライナ人達も、ソ連に反抗してドイツ軍に協力したため、強制労働でシベリアに移動させられていたのです。

私達の収容所には、ドイツ人とイタリア人が僅かですが早くから収容されていたようです。このドイツの人達から種々のことを学びました。その一つは、毎日食べるパンのことでした。日本人はパンをもらうと、こりゃ小さいなあとぐずぐず云いながらも一口で食べてしまいます。ドイツの人達は小さいと思うと、秤を作っておいて必ず計ります。目方が不足していると交換を要求します。それはそれは几帳面でした。

その二は、老人を大切にしました。毎朝作業場に行くのにトラックが迎えに来ます。日本人は若い者がさっさと乗り込みます。ドイツの人達は、

先ず老人を若い人達が加勢して乗せ、運転台の風の当たらない所に坐らせ、風の当る後方には若い者が乗るのです。

その三、作業場にトラックが着くと、日本人は若い者がさつと降りて、作業場の楽な仕事の方に走って道具を取り、寒くない室内の仕事を始めます。ドイツの人達は、若い人が老人を降ろして楽な仕事の道具を取ってやり、室内の寒くない場所に案内し仕事をしてもらいました。

その四、国際赤十字社から一年に一回ハガキをくれました。日本へ無事を知らせよと。日本人はこのハガキが本当に行くのかと疑って破ったり捨てたりしてしまいます。ドイツの人達はそれを見て、ハガキをくれないかともらいに来ます。日本人が「お前も一枚もらったではないか」といいますと、「ハイもらいました」あれはパパに出します。あなたが下さればママに出します。もう一枚もらえたら兄弟にも元気していると知らせますと云うと、どうせ出しても届かないハガキならほら持って行

けと、ドイツ人にくれてしまう人もおりました。

その五、ドイツの人達はソ連軍と戦闘を交えて敗れ、捕虜になっているので敵愾心があるため、ロシア人から物をもらおうようなことはしませんでした。日本兵がパンをくれ、タバコをくれと、物乞いしている姿を彼らは冷ややかな目で見ており、彼らは決して物乞いはしませんでした。

以上の五つが日本人とドイツ人との違いを目の前にして大変勉強になりました。

またソ連の一老人が教えてくれたものがあります。サマトフと呼ぶ老監督が、毎朝アメリカ製の十輪トラックで私達を迎えに来ます。白い顎髭を生やした老監督は乃木大将そっくりでした。

にこにこ笑いながら、収容所の門前に並んでいる私達に「ドラスチ（お早う）」と挨拶し、一番前に並んでいる私の頭を撫でて「マーリンケ、マーリンケ（子供、子供）」と言葉をかけてくれます。作業場に着くとあちこちから拾い集めた木片を燃やして温まってから作業をなさいと云ったり、

昼ごろになるとパンの欲しい者がおれば買って来てやると、とても親切に云ってくれます。疲れて休んでいても、他の監督のようにやかましいことは決して云いませんでした。

あんまり親切にしてくれるので、ある日通訳を交えて「監督あなたはなぜ日本人に親切にしてくれるのですか」と聞きますと、老監督は「聞いてくれてありがとう。私にもお前達と同じくらいの息子が二人おったが、残念ながら独ソ戦で二人共戦死して今はいない。お前達の姿を見ると自分の息子のように見えて可愛いのだよ。無事に東京に帰ってもらわなきゃならんからな。それと私は日露戦争の時、二〇三高地を守備をしていて日本軍に敗れた。あの時の日本の兵隊は強かったなあ、生命をかけて突撃して来た。あの姿は凄かった。私は日本軍の捕虜になってしまった。

乃木大将のおかげで助けられ、四国の捕虜収容所に連れて行かれた。その収容所の日本の兵隊さん達が親切にしてくれましたよ。今立場が代わっ

て戦争もしないあなた達がシベリヤのカラガンダに連れて来られて、寒い所で苦勞している姿を見てみると可哀想でならない。私は他の監督のように厳しくは云いたくない。この時こそご恩返しをと思うがなかなか出来なくてすまん許してくれ」と涙を流して話をしてくれました。私達はこの老監督の手を握り「スバシボウ(ありがとう)」と感謝の涙を流し、お礼を云いました。

親切の有り難さ、どなたか分かりませんが、四国での親切が、しかも四十年近く経たシベリヤでご恩返しを受けようとは思ってもよらんことでした。このペンを走らせながら、にこにこ笑っていた老監督の顔が目の前に浮かんで来ます。十二月、一月、二月は零下二五度以下になる酷寒の地で、腹を空かしながら「ラボータ(働け、働け)」でこき使われたシベリヤ、外便所のために小便に行ったら体中が冷えきって、水ばかりのスープを飲んでるので、すぐまた小便に行く。一夜に何回通ったことか。寝る暇もなく涙を流したシベリア。雪

解け時には道全体が川になり氷水の中を歩いて体が冷え込んで丸が固くなり、歩くのに苦勞して歩いた辛さ。二枚しかない靴下の替わりに使った布を洗濯して乾かしておけば盗れてなくなり、急いでタオルを半分に切って足に巻き付けて作業に行ったこと、このような辛い思い出の多い中にも微笑した思いもありました。

昭和二十二年七月十三日、軍医さん二人と将校代表、兵隊代表の板垣さんが私のところに来ました。何事かと驚いている私に向かって軍医さんが「実はお願いがあります、ソ連側からの連絡で十六日カラガンダ地区から、第一回目の帰国が始まるということです。その対象者は病人であること。この收容所の割当は百五十人と云って来ております。

翌十四日夜ソ連側の軍医の検診によって対象者が決定されます。問題は誰が引率者になるかです。ほとんど協議しました結果、あなたにお願いしようとして話し合って相談に来ました」といわれる

ので私はびつくりして「私は二十五歳の若僧ですよ、百五十人の病人を無事に日本まで連れて帰る自信はありません。年輩の立派な方に頼んでください」と断りました。

すると皆さんが口を揃えていわれることは「私達はあなたを離れたくはありません、せつかくこんなな平和な収容所にして下さったあなたを帰したくはありませんが、この病人達をお世話出来る人が他に誰がおりますか、あなたなら病人みんなが知っておりませぬ、病人みんなが甘えやすい人はあなたしかおりませぬ、大切な役目だからこそみんななそろってお願いに来ております」と懇願されますので断り切れなくなりました。

「それなら私を病人にしなくちゃならないがそれが出来ますか」と言いますと、軍医さん二人が「任せて下さい」といわれるので、将校代表と兵隊代表に「収容所の種々の活動は責任もって続けられますか」と言いますと「大丈夫です、お任せ下さい」と返事でしたので「それじゃ引き受け

ましょう」と約束しました。

十四日の夜中に「ソ連側の軍医さんがお出になりました」と呼びに来ましたので、急いで医務室に行きました。診察の一番目は私でした。日本の軍医さんが

「この人は胸が悪いです」と説明しますと、うんうんと頷いて聴診器を私の胸に当てます。

側から二人の軍医さんが「悪いでしょう」と言うのと軍医は、手を振って「ニノダー(違)う」と言うので、二人の軍医さんが声を高めて「確かに悪いのです」と言いよると、ソ連の軍医が聴診器をはずして直接耳を私の胸に当てました。

また二人の軍医が「悪いでしょう」と言うのでソ連の軍医は頭をかしげながらも「ハラシヨ(よい)」と言って、病人として合格しました。軍医さん二人は目を交わし、ほっとされたようでした。

もう一人のソ連の軍医が見ておりますので、おかしなことはできませんから、大きな声で「病人として合格しました。すぐ帰る準備をして下さい」

と言いました。結果はいかにと見守っていた人々もほっとした表情で廊下に出てから「よかった、よろしく願います」と手を握ってくれました。外に並んでいる人達は皆三級のやせた体でしたから文句なしに病人として認定されたようでした。百四十九人が認定され終了したのは朝四時ごろだったそうです。

さあ認定された人達は一日しかない時間に帰国準備にてんてこ舞いでした。

私が病人を引率して帰ることが皆に伝わったのでしよう、次々に「病人をよろしく頼みますよ、後は誰が世話するのだろうか？ お世話になりました」と別れの挨拶に來てました。私も涙を流し「お世話になりました、後は宜しく願います」と一人一人手を握り別れを惜しみました。相手が多いので声もかすれてしまいました。が有り難かったものです。

七月十六日八時三十分、庭に千人余りの仲間が並んで見送ってくれました。

ソ連の收容所長が並んでいる仲間の服装を点検して、少しいいなあと見える帽子、軍服、靴を脱がせ始めました。何事かと思つていきますと、帰る病人一人一人にこれと着換えさせました。「お前達は東京に帰るのに、この破れ服や靴では申し訳ない。少しはまあまあと言う姿で帰ってほしい」と取り換えてくれましたが、それでもぼろぼろに近い服や靴でした。收容所長から

「長い間ご苦労でした。無事東京に帰って下さい。パパママに宜しく」との挨拶を受け、カラガンド駅までトラックで送ってもらうことになりました。見送る人、見送られる人、互いに帽子を振り「ありがとう、あなた方も体に注意してねえ」。もう二度と会うこともなからうと思えますと、大の男が涙を流し、手を振り合いました。トラックで走ること十五分ぐらい、カラガンド駅に着くと長い貨物列車が停車しておりました。駅前には各收容所から病人がトラックで運ばれてきていました。一両に三十人ずつの乗車が指示され、乗車

しました。

カラガンダ地区には約五万人の捕虜が収容されていて、炭坑作業に従事させられた者が多かったようでした。今回は千五百人の病人が第一陣として帰国することでした。十時ごろにはみんな列車に乗り込みますとカラガンダ地区司令官と称される少尉が一両二両挨拶に来てくれました。

「日本の皆さん、長い間ご苦労様でした。ソ連にご協力頂きお礼申し上げます、日本に帰られたら二度と戦争のない日本を皆さんの手で建設して下さい。無事のお帰りを願っております」と、言葉短かでしたが、感謝を込めての言葉でした。

私は「オーチンハラシヨースバシボー（立派、立派ありがとう）」と下手なロシア語でお礼を言って地区司令官の手を握りますとニッコリ笑ってくれました。

午前十一時、列車はカラガンダ駅を出発しました。来る時は十月の雪景色でしたが、七月のシベリヤは青々とした平原と緑の森林でした。五十両

は全部満鉄の車両で車内は来る時と同じく二段式で、便所も準備してありました。病人ばかりですから昨日からの疲れで寝てしまいました。レールの音が子守歌のように響いて、何とも云えない夢心地でした。

列車が止まるとパツと目が開きます。来る時はどこに連れて行かれ、どんな生活だろうか、日本に帰ることが出来るだろうかと不安でしたが、今回は日本に帰れるという安心感がありました。その日本はどうなっているのだろうかとの不安が先に立ちました。

母親は、兄弟達はどうしているだろうかと気にかかりますが、今は病人達を一人も死亡させるようなことがあつてはならないとの気持ちでいっぱいでした。なにせ二十五歳の若僧で知識も経験もないだけに心配でした。

輸送指揮官は三十年配の背の高いゲペウ（秘密警察的な）の大尉でした。列車が停車の度に各車両を回り、片言交じりの日本語で「日本の兵隊さ

んよろしく」と笑って挨拶しました。大きな駅に停車すると「めしめし」と大きな声で呼ぶので、歩ける者を各車両から二人ずつ交代で出して、バケツに入ったおかゆとスープを車内で飯盒に分け合います。小さい黒パンを一個とお粥とスープです。また一日一回大きな駅では、お粥用、スープ用の水運び当番を一人ずつ出しますが、なかなかそろわないので出ない車両に協力をお願いしますが、それでも出ない車両があります。

日本人は上の偉い人からこれをやれと命令されると、文句も云わずにさっと実行しますが、今回のように各收容所からの寄り合いの場合、大将がいないので統制がとれずに困りました。列車が駅に停りますと、皆車両から出て大便小便をするのを、駅にいるロシア人が物珍しそうに眺めています。線路の両側は糞ばかり。この糞の状態を眺めると日本人のダモイ(帰国)列車が、何時間ぐらいい前に通過したかが分るくらい、糞だらけでした。

カラガンダ駅を出発以来私は、昼寝する間もな

く貨車の扉の隙間から見ておりますと、飛行場あり、対空砲火の陣地あり、戦車部隊の陣地があらこちらに見えました。行く時は、独ソの戦場や満州に派遣されてしまい、街並には男の姿も見る事が出来ませんでした。今では駅員も通る人達も男の姿が見られ、一年八カ月の間に、飛行場も陣地も立派に整備されているなあと思いました。出発してから四日目、輸送指揮官から車両責任者に集会の呼び出しがあり、輸送指揮官の車両に十人ぐらい集まりますと、通訳を通して注意がありました。

その注意とはまことに恥ずかしい限りで、

「皆さんに集まってもらったのは他ではありません。皆さんも見られる通り、炊事用の水運びをお願いしても、容易に人が集まってくれない。あなた方が食べる飯ではないか、どうして協力してもらえないか。また各車両に便器は設備しているのに、列車が停ると外に出て大便をなさる。駅には女、子供もいて皆さんの姿をどんな思いで見

いるのでしよう。残念でなりません。私は幼少のころからパパやママから、また学校の先生から、世界一優秀民族は大和民族だと教わりました。陸軍士官学校でも教官から世界制覇の出来る民族は日本民族だと教育を受けて来ました。この度スターリンから関東軍の精鋭を東京まで引率せよと命令を受けた時は、無常の光栄と思つて引き受けて来ました。その関東軍の精鋭がなんとこんなになだらしなく、野蛮な人達かとがっかりしました。私があなた方をお願いするのは、パパママが自慢して話してくれた優秀な日本人の姿を見せてもらいたい、お願いします」

と、涙を流して話す輸送指揮官の姿を見て、恥ずかしくてどうしようもありませんでした。こんなに日本兵を信頼してくれているのにと、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

幸い通訳が私の收容所にいた人でしたから、私に代表してお礼を云つてくれと指名されましたので、皆さんにおことわりして、輸送指揮官に「申

し訳ありません、それぞれの車両の皆さんに、あなたの言葉を伝えまして、残る僅かの日で汚名を返すように致します、お許し下さい」と頭を下げますと、私の手を握り日本語で「お願いします」と云つて笑いました。

私達は停車中に各車両に乗り込み「こんな恥ずかしい思いをしたことはない、残る僅かな日を助け合つて頑張ろう」と、お願いしましたら、みんな下を向いて頷いてくれました。

この日からナホトカの港に着くまで、皆さんが協力してくれましたので「ほっと」しました。毎日五両の車を回り「皆さんお体はどうですか。後何日すると日本ですよ、元氣を出して下さい」と一人一人に言葉をかけて回りました。病氣は氣からと申しますが、日本へ故郷へ帰れると云う希望があったからでしょうか、皆日ごとに元氣になり助かりました。

隣の車両は満州第二六八七部隊の第三大隊の人々でした。鞍山で別れたきりの人達でしたから

懐かしく話していますと、收容所を出る日まで叩かれたと云う話を聞いてびっくりしました。私達の收容所の話をしますと、「いいですね。私達は今日なお将校、下士官、古年兵の区別があり、軍隊時代そのまま、叩かれて死んだ戦友が何人もおられます」とうらやましげに話をしてくれました。

奇しくも平成四年になってその当時の第三大隊長からお礼のお手紙を頂くことになりました。ソ連抑留者への慰労金の申請を知らせたからです。

七月二十四日、明日ナホトカ港に着くという前日、北へ行く列車に日本人が乗っているのです、どこへ行くのかと聞きますと、再検査で不合格になり送り還されると云っているのです。

そして中から、「長崎県人はいないのか」と「私がおそうですよ」「長崎県はどこか」「島原市ですよ」「俺も島原市だ、島原に帰ったら広島の堀副薬局に、福島と会ったと、云ってくれと頼むのです、堀副薬局は私も「親戚だぞ、伝えておくれ」と云っているうちに列者が動き出しました。後日判明

しましたことは、彼は終に帰って来なかったとのことでした。

この話の中で、ナホトカで再検査が行われたら、病人でもない私は今度は間違いなく不合格になる。若し不合格になったら舞鶴港までどうしようかと。新たな心配が湧いてきて夜は眠れませんでした。

翌朝九時ごろ、私達の列車はナホトカの港が見える駅に滑り込みました。私は嬉しさの余り「ナホトカに着いたぞ！」と大きな声で叫びますと、寝ていた病人達が「ほんとですか」と跳ね起きました。よほど嬉しかったのでしよう。「着いた着いた、日本海の見えるナホトカ港だ」と皆大喜びで下車準備にかかりました。

駅前の広場には十数張りのテントがあり、その先に大きな船が見えました。病人達も元気が出て下車し始めました。輸送指揮官が「あのテントに入れ」と、走り回って指揮しております。

「第二十一ラゲルの人はこちらに」と百四十九人に呼びかけ、指定されたテントに案内しまし

た。「皆さんやつと着きましたねえ、もう安心ですよ、さあもう一踏ん張りですよ。二十人づつ別れてテントの中に荷物を降ろして下さい」と指示しておりますと、ソ連兵がやって来て「日本の兵隊、五列五列」と云って、荷物を降ろした人達を並べせました。何事かと思いつつ私も整列をしていますと、偉そうな将校が歩いて来て、今から身体検査するから軍服を脱げと云い出しました。

私にはピンと来ました。昨日行き違った人達が云っていた再検査、体格の良い者はまた奥地へ送り返すのだなあと思いましたが、「皆さん病人の方は心配いりません。軍服を脱いで検査を受けましょう」と、私自身は内心びくびくしながら軍服を脱ぎ始めました。

そこへ輸送指揮官が走って来ました。私達が軍服を脱いでいるのを見て「何をしているのですか」と聞くので「身体検査です」と云うと「えっ」と云って軍医少佐の所に歩みよって、大きな声で何か話し出しました。私には何を云っているのかわ

かりませんでした。が、通訳が教えてくれたのは、輸送指揮官が「あなたは何をしているのですか」軍医は「これから身体検査をして、働ける者はどこの収容所で働いてもらいます」指揮官は「誰の許可で検査しているのですか」指揮官は「何！内務大臣、私はスターリンからこの人達を東京へ送ってくれと頼まれている。その私に頼みもせず勝手なことをしてくれては困る。私は全員船に乗せる務めがある。止めてくれ」軍医「止められない。昨日も十五人ぐらい帰したのだ」指揮官「止めてくれ」軍医「止められん」指揮官「よおし止めないのなら貴様を射殺して俺も死ぬ」と云ってピストルを軍医の胸に向け「兵隊さんたち船へ船へ」と大きな声で叫びました。

私達は「スパシーボ（ありがとう）」と云って、急いで服を着て荷物を取り、船の方に向かって走り出しました。軍医はピストルを胸に突きつけられてどうすることもできませんでした。

すると一人の日本人が走って来まして、私を呼

びとめるのです。停りますと、「すみません急がしいのに、日本新聞の記者です、収容所の生活はどうでした」と言います。私は「日本新聞の方ですかご苦労さまです。新聞もよく読ませて頂きました。私の所は早くから階級章をはずして、将校も下士官も兵も区別なく和やかに生活しましたから、苦しい中にも少しは気分的に楽でした」と云いますと、「そりゃよかったなあ、早く詳しく聞いておけばよかった。帰国なさる方々にお訪ねしておりますが、今なお軍隊生活そのまま苦勞しておられる所が多いようです。今日は輸送指揮官がすばらしい人でよかったですね。あなた方は一人も残らず船に乗船出来るのでよかったですよ。先刻まで軍医さんと云い会っておりましたが、ご苦労様でした。日本に帰られたら立派な国をみなさんで造って下さい」と手を握って別れました。

日本新聞はハバロフスク市に本拠を置き、抑留者向けの新聞を発行しており、一カ月に一回ぐらい見たことがあります。

輸送指揮官が自分の命を賭けて乗船させたお陰で、全員帰国の途に就くことが出来ました。岸壁で手を振って別れを惜しんでくれた輸送指揮官の国境を越えた親切に感謝の涙を流しました。「ありがとう、ありがとう、お元気で」と日本語でいいました。さらばソ連よ二度と来ることもないであろうが、得難い人生勉強になりました。一回九人の病人を九日間お世話した毎日の忙しさ、でも誰一人心配する事故も発生せず、母国の船に乗船させることが出来たこと、正に二十五歳の男の偉業だったとほっとしました。

船の上では「お帰りなさいませ」と引揚げ援護局の係官や船員の方々が日本語でやさしく迎えて下さいました。嬉しかった。「興安丸」は七、五〇〇トンぐらいと聞きましたが、もうロシア語で「ダワイ、ダワイ」と云う声を聞くこともない。やれやれと一息つく間もなく身上調査が始まりました。ソ連側の名簿に合わせての確認作業でした。

昼間は真白い米の飯でした。お粥ばかり食べて

来た私達には、涙の出るような有り難い御馳走でした。客船ですから列車とは違い足を伸ばしてゆっくりと寝ることが出来ましたし、便所で用を達するにも遠慮気兼ねもなく用を達すことも出来ました。

日本海の波は少し荒らく、病上がりの皆さん達 はよるめきながらも、船室を物珍しく歩き回る顔にもやつと笑みが浮かんで来ました。横になりながらうとうととしておりますと収容所の種々の思い出が目には浮かんで、知らず知らずのうちに涙が頬を濡らしておりました。反面、島原にどうして帰ろうか、便り一つ往復してないからみんなびっくりするだろうなあ。昼間帰ったらよいか、夜帰ったらよいかと、種々考えてなかなか寝つかれませんでした。

翌朝懐かしい一年十カ月ぶりの味噌汁は、云うに云われぬおいしさでみんな顔を見合わせて喜びました。すっかり安心して切った皆さんからは笑い声が聞こえて来ました。

十時ごろ一隻の船が近づき日赤の看護婦さん六人ぐらいが乗船してきました。その顔を見た時驚きました。看護婦さん達の鼻の低いこと、ロシア女の高い鼻ばかり見てきただけに、自分の鼻の低いのを忘れて看護婦さんの鼻が可哀想に見えました。

やがて簡単な消毒が始まりました。船の前方には懐かしい故国の山が見え始めました。夢にも忘れなかつた日本の山々「やつと帰って来たぞ、日本へ」と思わず心の中で「万歳！」と叫びました。消毒が終わった後、簡単な昼食を取っている間に、船は舞鶴港の岸壁に静かに横付けしました。甲板に出て見ると、岸壁には日の丸の小旗を持った人達が「お帰りなさい」と、大きな声で呼んでいました。

二十六日十四時、私達は援護局の人達の指示に従い順序良く下船しました。故国の土を一步一步踏みしめて、出迎えの人々に「ありがとうございます」とお礼を云って、指定された兵舎の跡と思

われる宿舎に落ち着きました。

ここが日本本土だと思えますと感慨無量、やつと日本にたどりついたと大きな笑い声が上がります。それを打ち消すように「山田さん、佐藤さん、今からお尋ねがあります。事務所に二案内します」と、呼び出しが始まりました。何事だろうと事務所に近づきますと、口を揃えるように米軍の二世が日本語で「収容所の生活がどうであったか、帰って来る途中飛行場は何カ所あったか、陣地はどうだったかなどと聞きます。病人だから寝ていて分からない」と云うと「うそ云うな、うそ云うとまたソ連に帰す」と云う。困っていた二人に替り、私は「分かりました。私が事情を話します」といい事務所に走り込みました。

事務所の中央に、立派な旧軍服を着た責任者らしい人と六人の米軍の二世が、帰還兵の事情聴取を行っておりました。私は中央の責任者らしい人に「私はカラガンダ地区二十一収容所から病人百四十九人引率して来た者です。今十人ぐらいの人

達が調べられました。私にも責任がありますので私も調べて下さい」と申し込みました。

責任者は慌てて調査対象者名簿を見て、貴方は「対象者名簿に記載されていないですね、どんなご用事ですか」と言います。私は大きな声で「貴方達は、ソ連から病気で帰って来た人達をどうしていじめるのですか。この人達は病気で寝ていた人達です。何を尋ねられても貴方達を満足させる返事は聞けませんよ。元氣である私を調べて下さい。私達は好きで「捕虜」になったものではありませんよ。見てみて下さいこの破れ服を。この服とこの破れ靴が私達の収容所で一番立派な服であり、靴ですよ。それに対してどうですか貴方の着ているその立派な服を。病人達は今やつと故国日本に帰って来たんです。ソ連を恨みながら帰って来たのに、またそのソ連に帰すと脅かすとは何事ですか。日本人の血の流れる人のすることですか」と。私

責任者が慌てて私の手を引っ張り、「ちよつと

待つて下さい。こちらにどうぞ」と次の室に私を連れていきました。責任者の方は「私は内務省から派遣されて来ております調査課長です。おっしゃる通り私も日本人としてこんなことはしたくはありません。占領軍司令部から命令されておりますため申し訳ないことを致しております。なにとぞご理解して下さい。決して悪い結果になるようなことは致しません」と詫びられるので「私の住所を書き留めて下さい、何かお尋ねなさることがありますたら何でも問い合わせて下さい」と申し上げ事務室に戻りました。そして米軍の二世の方に向かって「お努めご苦労さまです、今お尋ねになつて居る方々は病人です、貨車の中では寝て居ましたので、外のこととは分ならず正直に知らないと言つています。なにとぞその返事を信用して下さいお願いします」といいますと、六人の二世の調査官も「分かりました」と言つてくれました。

「無礼しました」と言つて外に出た。調べられた人達が心配して室の外で待つて居ましたので

「皆さん心配は無用です」と言い一緒に宿舍に帰りました。皆さんほつとされて、私に「最後まで心配かけて」と涙を流されました。

その夜、援護局の人から旅費として百円ずつ渡されました。皆は最後の夜と、一晚中種々な話を語り明かしました。そして翌朝別れの涙を流し、手を握り、それぞれ故郷へと出発しました。二度と会うこともないでしょうが、無事でお帰えられることをお祈りしました。

私も舞鶴駅から混雑する列車に揺れながら、思い出が次々と頭の中を駆け巡りました。ウラジオストク経由で日本に帰すと貨物列車に乗せられ、北満州から南へ下る一般邦人の方々が「兵隊さんお元気で」と手を振っていた姿、酷寒の地で空腹に耐え、ソ連兵に銃を突きつけられて働かされた姿、大隊長が私を殺すと軍刀を振り上げた姿、二十三歳の若僧を皆のお陰で大工左官の方々が大きなパンを三十六人分毎日分けてくれたこと。

小説を書いてもらい、各兵舎で朗読して回つた

こと。文芸同好会を結成し詩、俳句、短歌のグループを作って、皆喜んで参加してくれたこと。下手な脚本で演芸を実演したこと。サマトフ老監督の親切にしてくれたやさしい姿、二十五歳の若僧に一回九人の病人の命を託し、ダモイ第一陣の引率者を選んでくれた収容所の千数百人の人々の温情。輸送指揮官の日本人を尊敬し忠告を言つて下さつたあの言葉と、ナホトカ港で自分の命を賭けて全員を乗船させてくれたあの姿。短い期間でしたがドイツ人捕虜が数えてくれましたゲルマン魂の教訓。わずか一年八カ月のシベリヤの抑留生活が、私の人生を大きく転換させてくれました。また立派な勉強をさせてくれました。

舞鶴に上陸したその瞬間、私は誓いました。尊い命を御国に捧げられた皆様、皆様の分まで祖国再建に微力を尽くします。なにとぞ私を護つて下さいと。

舞鶴駅を出発し、ごつた返しの大阪駅で乗り換えて山陽線で福岡へ、ボロボロの服を着ているの

で物珍しそうに私を見られますから「すみません汚い服で、昨日ソ連から帰つてきましたので」と言いますと、側の方々が「まあご苦労さまでした、さあここにお座り下さい」と席を譲つて下さるので、また涙がぼろぼろと流れ出しました。

日本の人達を親切だなあと感謝しつつ、博多駅で長崎行きに乗り換えました。福岡市も空襲で車窓から見えるだけでも憐れな姿でした。諫早駅で懐かしい島原鉄道に乗り換え、島原半島を南へと走りました。国破れて山河有り。島原半島の景色は青々として美しく見えました。

暑かつたが七月二十八日十七時四十二分、島原湊駅に降りた私は霊南橋を渡つて、一目散に白土船津上の我が家に飛び込みました。「ただいま！」の聲に家中の者がびっくりし、母親、兄弟一同涙を流し、私の無事帰宅を喜んでくれました。仏壇の前に座り亡き父親に無事を報告しました。

昭和十八年十一月三日、島原を出発してより三年九カ月ぶり、近所の方々も親戚の皆様も、よく

帰れましたねえと、喜んで下さいました。私は早速、八月一日町内の青年のみなさんに集まって頂きました。「皆さん日本の再建は私達若者の使命です。先ず国の宝であります老人を大切にしましょう、私達の後を継いでくれる少年達を指導し、私達が手本を示すために青年団を結成してはいかがでしょうか」と提案しましたら、出席者一同やりましよう、賛成してくれました。

早速、白土船津上青年団を結成し活動を始めました。帰国四日目の社会奉仕への出発でした。以来五十七年余、ソ連で学び得た教訓を胸に秘め、社会奉仕に微力を尽くしてきました。

昭和四十年一月十九日、日本を救って下さった天皇陛下へのご恩返しの一端をと考え、皇居の清掃奉仕を実施しようと、島原市長を始め島原半島十六町の町長、議長さん方に相談を致しましたところ、満場一致でご賛成下さいました。長崎県知事を最高顧問に、実施委員長は島原市長、顧問は十六町の町長と議長にご就任を頂き、全国にもま

れな組織として発足しました。

以来四十年、昭和天皇より七十三回にわたり有り難いお言葉を賜り感激の涙を流しました。

今上陛下より、皇太子殿下であられました時を通算しまして百六回の有り難いお言葉とご激励のお言葉を賜り感激にむせびました。併せて種々のご下問も頂戴致しました。

昭和五十一年からソ連抑留者救済運動のお世話、昭和五十五年九月から元軍人軍属で恩給をもらっていない人々にも、政府の暖かい恩典をと訴えて二十五年間、恩給欠格者運動に努力させて頂いております。

この間、靖国神社への参拝も二百回を越しました。すべて人様のお力添えのお陰です。今日まで各方面から頂きました表彰状と感謝状は、勲四等瑞宝章に藍授褒章など八十七枚頂戴致しております。

これもソ連での抑留生活の貴重な体験と人様のお力添えの賜と心から感謝し、八十五歳を迎えた

今日、残された僅かな日々を大切に、世のため、人のためにと頑張っております。

シベリヤで流した涙 伊達じやない

死んだつもりで 社会に奉仕

【執筆者の紹介】

執筆者は、大正十二年十月生まれ。大連通信局西広島場郵便局勤務中の昭和十九年一月、現役兵として満州国新京の高射砲強第二六八七部隊に入隊、南方移動を命ぜられ南下、大連から船で南方への展開が予定されていた。しかし鉄道輸送の遅れから、大連での出帆に間に合わず、鞍山に駐留中の備第二六八六部隊が代わりに大連に南下し、乗船した。この部隊はサイパン島で玉砕。執筆者の所属部隊は代わって鞍山の昭和製鋼所を防備する。昭和二十年六月よりB 29の爆撃が激しくなり、八月十五日、奉天北陵にて終戦となった。昭和二十年十一月三日、カザフ共和国のカラガンダ第二十一収容所に抑留され、建築作業をさせられる。

昭和二十二年七月、百五十人の病人の引率者に選ばれ、七月十六日、カラガンダ出発。七月二十六日、舞鶴港に上陸、復員する。